

第3回市民検討会議

1 開催日時

平成 22 年 8 月 11 日(水) 午後 3 時 00 分～午後 5 時 00 分

2 会場

熊本市本庁舎7階会議室

3 出席委員(順不同)

大住委員長、荒木副委員長、中村委員、三島委員、片山委員、岩本委員、藤原委員、吉浦委員、守田委員、永木委員、林委員、奥山委員 15 名中 12 名出席

4 次第

(1)開会

(2)事務局説明

・今回の議題の確認

(3)議題

・重点協働プロジェクト(案)における市民・市民団体・事業者・市の取り組みについて

【資料:第3次熊本市環境総合計画 重点協働プロジェクト(案)】

(4)その他

発言要旨

■事務局挨拶

ただいまより第3次熊本市環境総合計画策定に係る市民検討会議を開催いたします。それではこれより会議の進行につきましては第3次熊本市環境総合計画市民検討会議設置要綱第5条第2項に基づき、委員長にお願いしたいと思います。大住委員長、よろしくお願いいたします。

○大住委員長

それでは私が議長を務めさせていただきます。今回も委員の皆様のご協力をお願いします。早速議題に入りたいと思いますが、次第にありますように事務局より説明をお願いします。よろしくお願いいたします。

■事務局説明

配付資料確認(構成案(たたき台)、熊本市環境総合計画(案・未定稿))

- ・構成案(たたき台)変更点説明
- ・第3次熊本市環境総合計画(案)内容説明

○大住委員長

ありがとうございました。今のご説明に対して何か質問がございますか。それから事前送付された資料について、わからない用語とかありましたら、ここで質問しておいてください。それでは続けてお願いします。

■事務局説明

- ・事前送付資料「重点協働プロジェクト(案)」説明

○大住委員長

ありがとうございました。お分かりいただいたでしょうか。なければ早速議論に入っていきたいと思えます。この資料をお忘れになった方いらっしゃいますか。皆さんお持ちですね。それではまずは未定稿の第2章、計画の基本理念に計画の目指す都市像という文言があって、そこに“世界に誇れる環境文化都市”ということがうたってあります。最初の会議から2回会議をしたわけですが、その中で、私たちが自由に話したことをそれぞれの項目にうまく当てはめてくださって、いろいろな文言になり、それから最初の7つの理念が5つになりました。ですから自由に発言いただいて、その中からということにさせていただくことにして、皆さんそれぞれの活動の基盤を持っていらっしゃる方ばかりですので、それを元に考えていることをおっしゃってください。“世界に誇れる環境文化都市”という文言もこれでいいのかとういことも含めて議論していただきたいと思えます。それではまずこの文言についてもし気がついたことがあったら発言してください。

それからまず“ひとづくり”ということ、個別に説明していただいておりますし、今の説明でお分かりいただいたと思います。2つの皿、ひとづくり、まちづくり、皿の中身を私たちが検討すると

ということですので、皆さんの活動に基づいてご発言いただきたいと思います。中村委員は第2次環境総合計画を策定し、実行部隊として今まで運営してきたエコパートナーくまもとの会長としてご発言ください。隣の三島さんはその中のワーキンググループの一つ、ゴミなくし隊の委員としてご発言をいただきたいと思います。それぞれ皆さんの寄って立つところでご発言をいただきたいと思います。でもあまり堅苦しく考えないで、こんなこと言っているのかなということまで含めて発言してください。本当は手を挙げて発言をいただきたいと思っているのですけれどもいかがでしょうか。それでは中村委員お願いいたします。

○中村委員

今エコパは6つのワーキンググループで活動をやっておりますが、なかなか横の幅が広がらないというのと、毎年同じような取り組みをやってきて、若い人たちが入らない仕組みを作ってしまったので、それを打破するために役員会とかいろいろやっているわけです。エコパの会議に若い方たちが来られたときには固まった考えの人たちが多いもので、なかなか若い人たちの意見が取り入れられないのと、大住委員長が言われたようにポツと言ったときにそれをどうやっていこうかという話し合いの場ができていなかったんですね。要するに環境というのは何をしなくちゃいけないというのは決まっているので、その中で若い人たちは例えばキャンドルをしますよとか。なんと言いますか、来年からいろんな人から意見をいただいて、プロジェクトをつくって輪を広げていく形をやりたいと思っています。それと私は中島校区のまちづくり委員会で会長をやっております。自治会でも環境部会というのがあります。自治会での環境部会の問題というのはごみの問題とか、ある程度特化してしまうんですね。そこに入ってしまうと、ごみ問題とかごみの出し方とか、講習会とかで終わってしまうんです。熊本市でCO2が何パーセント出ているとか、水をどのくらい使っているとか。最近マイバッグ運動が始まっています。若い奥さんたちは結構やられておりますが、ちょっとした買い物とかのときはレジ袋をもらったりします。言いたいことがちょっとわからなくなってしまいました。

○大住委員長

私の持っていき方が悪くてすみません。大項目でここに環境教育とありますね。そこに“新たなライフスタイルの提案・啓発”ということで、“市民一人ひとりの環境意識の更なる醸成を図るための目的別講座の開催(例、熊本の自然を知る、グリーンコンシューマーの育成、環境負荷の少ない暮らし、地産地消など)”ということでそれぞれの役割、取り組みというのが右側に書かれていますね。それぞれの取り組みの所で「こんなことが入ったらいいんじゃないか」、「自分たちはこんなことを取り組んでいるけれども、それはここが足りないと思っている」とかというようなことを出していたいただきたいなと思います。新たなライフスタイルの提案・啓発、ライフステージ別環境教育の推進。ライフスタイルを変えましょう。それからライフステージ。今中村委員からも出ましたけども、「ある一定の年齢のばかりで活動しているからもっと若い人たちが入ってくれるといい」とか、前の資料で「熊本は一人暮らしのお年寄りの割合がものすごく高くなっている、そういうお年寄りを引っ張り

出してくるような何かができないか」とか。ライフステージは幅が広いです。そんなこととか地域別、熊本市は 73 万人ですが、東西南北に分かれているし、さらにこれからは区割りになります。そういう「地域の特色を生かすような活動はどうやったらいいのか」とか、それぞれに役割、「市民はこんなことができるけどこんな課題が、事業者はこんなことをしたいと思っているけどこんなことが課題だ」とか、そんなことを出していただけたらと思います。もし皆さんのご意見がこれとだぶってもいいと思うんです。言葉が違うんですから。そのあたりを自由に出してください。中村委員には今発言していただいたばかりですから反対周りで、吉浦委員、事業者としてご発言をいただいていますか。どこの部分のどれはこういう風にしたらいいとか言っていたらいいと思います。ご自分の事業を通してですね。

○吉浦委員

うちは事業者ということですが、特殊なんです。エネルギー供給業者なので、お客さんには省エネのコンサルをしたり、毎年団体さんの所に行って省エネ、家電の使い方を会社としてやっております。一般的の事業者としてはやっておりません。

○大住委員長

それが重要だと思うんです。今おっしゃったのはまさにそうなので。環境教育の中でこういう部分を担えるということだと思うんです。

○吉浦委員

うちも小学校あたりに出前授業をやっているんですけどね。

○大住委員長

具体的にお伺いしてよろしいでしょうか、どのような出前授業をどのようになさっていらっしゃるかというのを。

○吉浦委員

出前授業自体は遊びみたいな形で作ってもらって電気で動くというようなことです。興味を持たせなくてははいけませんので。その中に環境、エネルギー問題。日本の場合はエネルギー自給率が 4%しかありません。食料自給率が 4 割とか言っていますが、エネルギーが止まってしまったら、原子力を入れても 18%しか自給率がありません。エネルギーの資源の確保、省エネということですが、必要なエネルギーは使わないといけません、無駄には使わないということを環境教育、理念としてやっています。

○大住委員長

それはまさに事業者としてですね。

○吉浦委員

どちらかと言えばエネルギー供給業者としてのという感じが強いんです。

○大住委員長

事業者さんに求めているのはそういうことだと思います。そうすると、そういう活動をする上で、今、ネックになっていることがあるとしたら、それを乗り越えるために、言ってみればこれは 10 年後を目指した熊本都市像ですよね。ですから省エネルギーの推進ということがうたわれてくるのかなと思います。何かネックになることというのはありますか。

○吉浦委員

少しずつ、徐々に広げていくしかないのかなと思います。

○大住委員長

例えば教育委員会への働きかけが、なかなかできないということなどはありませんか。

○吉浦委員

どちらかという和学校と直接という感じです。

○大住委員長

ありがとうございました。それでは守田委員よろしいでしょうか。

○守田委員

私も事業者の分類に入れてもらっていますが、農業をやっている人間は市民に近いのかなと。特に後継者クラブとなると、まだまだ親の背中を追いかけて仕事をしている人間が多いもので。後継者クラブで役員をさせてもらう、市の後継者クラブで会長をさせてもらってこういう会議に呼んでいただけてもらったおかげで、環境に意識が向いたのは確かなんです。田舎で役員さんが考えていることが、私たちの世代を考えることもこうやって載っている。今悩んでいるのが環境意識を持たせるということですが、環境以前に農業に意識を持ってくれないということが多いです。同じ若手でも、特に若い、高校出てすぐとか。正直言うと一回社会に出て戻ってきた人間の方が、そういう農業や環境に対する意識が強いですね。すぐ親の仕事の跡を継いだりする人間は親が全部のような感じです。私たちが言うことに対して、変な言い方をすると面倒くさいからなくていいという感じがあります。

○大住委員長

そこを突破するにはどうしたらいいでしょうか。

○守田委員

それが今一番悩んでいるところで、その下にある小学校を通じてだとか、環境教育とかですね。そういうのを我々も水土里ネット、土地改良とかの勉強会をしましょうということを打ち出して、もつと地域のこと、熊本のことを知ろうという活動を少しずつやっています。ただ、それに来るのは限られた人間です。忙しいとかいう言い訳ばかりして、そこ1時間くらいだから来てくれればいいのに来ないのが現実です。学校なども水土里ネットさんは小学生と一緒に排水とか、EM菌とかを流したりして、水をきれいにしようとしています。でも親世代に文句を言うわけではないですが親が面倒くさいと思っているんです。親も一緒に参加するんですが、親が面倒くさいと言っているのでは子どもも意識は向かないと思うんです。だから私たちはいかに同じ農業をしている若い人たちをもつと、農業は楽しいんだよって。もつといろんな所に行って活動して、いろんな人と話をしようよというのを勧めているんですけども、なかなか向いてくれない。組織が組織だけに辞めろと言えば、会社じゃないからすぐ辞める、辞められる組織だからですね。だからそういう人間をうまく私たちのほうに興味を持たせて、引き込むかが私たちの課題です。農業をしていると環境は必ず絡んでくるので。住むところ、生活するところ。食に関してもそうなんです。

○大住委員長

わかりました。農業は国土をつくると言われています。まさにそうだと思います。熊本の地下水だって農業の役割が大きいのですが、そういう話というのは出るんですか。

○守田委員

川の地下水とかですか。地下水のことも書いてはありますが、地下水を汚す前に川の水を汚さないというのが一番の考えです。街中は排水とか下水とかが通ったりして結構整備されているわけです。ですが、まだまだ私たちの一番端っこの田舎には天明新川というのがあるんですけども、そこに流れてくる水は、ちょっと上の地域の生活用水が私たちの生活用水になっているんです。変な話をすると隣で食器洗った水、川に垂れ流した水を使って農作業に使ったりとか。昨日も街でそういう会議があつて、熊本市長も来られたのでそういう話が出ました。皆がそういう意識を持ってくれないといけない。逆に私たちが阿蘇の上流の人たちの意識も持ってあげなくてはいけないというのが一番だと思います。

○大住委員長

わかりました。貴重な話をありがとうございました。またあとで発言をしてください。では永木委員お願いします。

○永木委員

はい。私は大学での環境活動とか、環境に絡んだひとづくりやまちづくりに関する活動をいくつ

か紹介したいと思います。まず県立大学で取り組んでいる事業として、里山再生といって、和水町で行われている事業です。和水町と県立大学と富士電機システムズという産学官連携で、もともと水田だった場所が、人手が入らなくなったことで、草木がたくさん生い茂って人が入れなくなった場所にその3つの産学官連携で、水田を元に戻そうという取り組みが行われています。大学でのそういった環境活動への参加はとても大変だったり、きついかというイメージがあると思うんですが、いろんなことが、人と人との交流だったり、現地の人との交流など、大変だけど人と人と交流して汗を流して一緒に取り組むことによって達成感があったりして、次も参加しようということにつながるのととてもいいことだと思います。その里山再生の他にも県立大学では“もやいすと育成プログラム”というのがあって地域のリーダーとか担い手、地域づくりに関する問題について解決していこうという人材育成プログラムが行われています。あとは東海大学で白川調査といって一斉で熊本キャンパスと阿蘇キャンパスから同時に水質調査を行っています。毎年行われることで水質の変化や生物の状態などを調査していくような取り組みが行われています。どれも学生が主体になって、大学というのは環境活動の環境教育の場としても有効なので、もっとそういった取り組みが盛り上がって大きなものになっていくとチャレンジしてみようという学生が増えたり、そういったきっかけづくりというのは大事だなと思いました。

○大住委員長

ちょっと質問していいですか。さっきの里山事業の産学官、“学”はおっしゃったように学生が中心になってということでしょうけれども、大学側としてどういったバックアップがあるのか、それから“官”とどういう風に連携しているのかという産学官の連携の仕方というのを教えていただけますでしょうか。

○永木委員

県立大学では包括協定というのがあって、和水町以外でもいろんな町と包括協定を結んで、地域貢献、地域活動についてバックアップしていこうという取り組みがあります。その里山再生という話が出てきて富士電機システムズも参加したいということでその3つが連携したんだと思います。

○大住委員長

ありがとうございます。私は逆に富士電機さんからそういう話をうかがってしまして、事業体としてそういうボランティア活動ができるというのはとても大きいということを報告なさいましたので、逆の立場からおうかがいすることができてよかったです。それでは林委員、学園大の取り組みをお願いします。

○林委員

私は今、宮北先生のゼミに参加していて、持続可能性の追求というのをテーマに毎週授業を受

けています。6月の終わりに地下水中流域の田植え体験というのにゼミで参加しましたが、そのときに小学生との交流を含めて環境教育というのがいかに大事かというのを改めて学ぶことができました。私は熊本市内に住んでいないんですが、私が住んでいる宇土にも轟水源など結構有名な自然の場所があります。自分が小学生のときに自分が住んでいる地域についてあまり深く考えたこともなかったし、このように地下水を使った田植え体験を通じて、近所に住む小学生たちが自分たちの地域について深く考える機会があるのはとてもすばらしいと感じました。その体験に参加したのが小学生とその保護者中心だったんですが、若い世代というか学生が参加しているのが私たちのゼミだけで、10人くらいしか参加していなかったんで、そこが寂しかったと思いました。学校でも友達に「今度田植え体験に行くんだ」と話しても、環境福祉学科という学科にいるにもかかわらず「ああ、そうなんだ」とか「楽しそうだね」というような人ごとのような意見しか出なかったんで、もっと興味を持つような考えが私の周りにも広がってくれたらなと感じました。

○大住委員長

ありがとうございました。ちょっと戻りましょう。永木委員、今の意見について、こういう方法だと広がっていくというようなご意見は何かお持ちでしょうか。それは守田委員に対してもだと思えますけれども。

○永木委員

やはり環境活動に対するイメージがもともとあって、楽しくないとか、そういうイメージが強いと思います。実際経験すると意外と楽しかったり、一緒に活動することによって楽しさがあると思えます。きっかけづくりとかメリットとかそういうものがあると、いろんな人が参加することによって人と人との出会いが生まれて、自分が吸収するものというようなメリットがあるともっと参加者が増えるのではないかと思います。

○大住委員長

ありがとうございました。では次、どういう立場になりますでしょうか。

○奥山委員

私は今、永木さん林さんがおっしゃったようにいろんな活動に一市民として参加させていただいて、どうしたら皆さんに環境マインドが広がっていくのかなと、それを日々考えているところです。個人的には私が今までやってきた事というのは愛・地球博をきっかけにロハスコンシェルジュという認定をロハスクラブからいただきました。これは英語の **lifestyles of health and sustainability**、健康的な生活と持続可能性を求めるライフスタイルということで、これはもともとアメリカのマーケティング用語なんです。大量消費、大量生産、大量廃棄というアメリカで社会起業家の人たちがこういう健康的な生活を送る人たちの消費行動がオーガニックだったりとか、化学薬品を使わないとか、そういう商品を求める人が多くなったということに目を付けて、そういう製

品を作ろうということで生まれたマーケティング用語なんです。それが 5、6 年前に日本に入ってきてロハスという言葉が定着しているんですけども、日本ではそういう意味より、ヨガでお茶をして・・・といったファッション的に捉えられている面があります。そういうことでロハスに興味を持ってロハスコンシェルジェになったんです。

個人的には県立大学公開講座では永木さんをご存じだと思うんですが、古賀教授、今は学長になられています。篠原教授とかの講座で環境学とか環境行政も学生さんと一緒に学ばせていただきました。私もこういうことを勉強はしていたんですが、基本的に家でのおんびりしているのが好きなものですから。何もしないでいましたが、去年あることをきっかけに私も何か少しでもアクションを起こそうということで NPO の会員とかになって、いろいろなことに市や市民活動団体事業所が行う学習会とかに顔をつっこもうと思って行っているんですけども、来られている方が一般市民がほとんどいないんです。私なんかは隅にすみませんという感じで腰掛けています。やはり当事者だけが圧倒的に多い、小さいテリトリーの中の知り合いの方たちが声を掛けて来みたいな感じなんです。環境省が設置している NPO が熊本市にあるんですが、そのスタッフの方にそういうことを感じていると話したら、びっくりしたことがありました。「いろんないいことをやっている団体がいらっしやるので、それをつなげていけば、市民に伝わって来ないことが大きな波となって広がっていいのですね」と言ったら、返ってきた言葉が、「何かするとなったらお金がいる。お金がいるということになったらどこもお金がないので、出したがらないからできません」。A と B がつないでやりましょうとか、全部やりましょうとか、ある程度やっていることもあるんですけども、それが大きくつながらないというか、つながればいいですねと言ったら、今のようなことを言われてとてもショックでした。そこで NPO はお金がないのかと初めて気づいたんですよ。そういうことでそれをどう風につなげていけるかということと、それをやっている方自体も批判するようで悪いんですが、自分たちの活動だけで満足している、こんな事をやっていますよとアピールするだけで終わって、他の方たちがプレゼンテーションされるときには帰ってしまわれる。同じ環境を目指している、目指すところは一緒なのに、どうして交流を深めて広がっていかないのかな、自分たちのことで自己満足をしているような感じを受けたんです。だからもう少し皆でつなげていこうみたいな、気持ちが起こってくれば、例えば 6 月は環境月間ですし、アースウィークもありますね。そういうときに私も参加させていただいて、一般市民の参加が少ないんですね。だからステークホルダーが主なんです。もう少し、例えば代々木公園のアースデイもものすごいイベント行っていますよね。ああいう風に盛り上がればいいなど。ああいうのを二の丸公園でやったりとかして。そういうことを思っています。だから広がりをどうやってやったらいいかということをも自分なりに模索しているところなんです。

○大住委員長

ありがとうございました。今のは貴重な、欠けている視点というか、ここに盛り込まなければいけないことだったですね。皆さん今のように自由に発言していただくと、その中から本当に宝石のような言葉を拾い上げていきますので。今のは市民運動団体をしている人間としても耳が痛いという

かいつも悩んでいることだったので、それをどうするかというのをここでは議論していきたいと思います。いい問題提起だったと思います。次、藤原委員よろしいでしょうか。

○藤原委員

資料をいただいておりますのでひとつづくりという点からお話をさせていただきたいと思います。私は YMCA です。このくくりでいくと事業者ではなく市民活動団体に近いのかなという風に思っています。私どもの中でもひとつづくりというのは重要なテーマです。特に私たちが重要だと考えているのが子ども、若者ということです。子どもに関して言いますと水前寺幼稚園が YMCA にはあります。そちらは 2007 年に市民協働プロジェクトでお日様発電の太陽光発電を園の屋根に設置いたしました。園の中でも子どもたちに対する環境教育というのを取り組んでいます。子どもたちに対する環境教育というのが家族であったり地域を巻き込む力が大きいなというのを日々実感しています。大人になってきて、大人の価値観を変えるというのは難しく時間がかかることだと思います。そこになってくると、どうしても楽しんでとかいろんなキーワードを持ってこないとなかなか大人を呼び込んでというのは難しい。子どもたちの中でもある程度、生活習慣の中で当たり前になるような取り組みを日頃の中でやっていくということは大変意味のあることではないかと考えています。例えば子どもたちでは簡単な目標を自分たちで園児が決めるんです。「コップ 1 杯の水で歯磨きをしよう」とか、「家の電気で使わないところは消していこう」とか、そういったことを自分たちで目標を立ててやっていくんですね。それが園でできると家に帰って「お母さん電気が点いているよ」と言って消していく。それで親が気づかされる。子どもたちを通して家族、社会を変えていく力があるということからも、やはり私は今回の熊本市のこれからの 10 年というところでも子ども、特に小学校と限定せずにもう少し小さい時期から取り組んでも十分意味があるのではないかと感じます。それがおそらくこのプロジェクトの中にも書いてありますライフステージ別という表現はそういったことも考えられてのことではないかと思えます。特に市のところで、幼少期や学校教育における環境学の機会を広げるという風に書いていただいているのは大変意味があると考えております。

それからもう一つ、若い人たちというのは、単なるこちらから何かを教えたりではなく、何かをする対象としてではなく、若い人たちは自分たちから何かを考えたりこれから作り出すという力を十分に持っている人が多いと思います。若者をもっと主体にした取り組みというのをやっていく、逆に行政であったり事業所であったり、地域というのがそれをサポートするくらいの、もっと若い人たちに主体性を持っていただくような仕組みというのも大切ではないかと感じています。

それから少しちょっと資料をいただきましたのでこの中で気づいたところ、言葉的なところもあるんですが、少し申し上げたいと思います。これは文字的に読んで気づいたところですので、皆さんからのご意見をいただければと思います。まず最初の“新たなライフスタイルの提案”というのが私は最初読んだ時にあまりピンと来なかったんです。“新たなライフスタイル”というのがまず抽象的なイメージかなというのと、“ライフスタイル”と限定してしまうと、市民とか事業者とか分けた時にどういうことなのかなと考えました。また“新たな”と言ってしまうと、これまでのことを否定している

ようにも取れなくもありません。逆に言うと昔は当たり前に行っていたけれども今はそれが忘れられているといったことも環境ではあるかと思えます。ライフスタイルというのは言い換えると“新しい価値観”ということかなと感じました。少しこのあたりが市民の方も読まれた時に、ここでは会議をしますのでわからなかったら質問であったり、聞くことができるんですが、文章になってみた時にもっとずっと入ってくるような説明であったり、言葉というのも考えた方がいいのかなと感じました。それから新たなライフスタイルの項目のところでも市民のところも“環境意識を高める”となっていますが、これからの10年は意識を高めるだけではなく、実践するというようなことも市民の取り組みの中に盛り込んでいったらどうかと感じました。

それから地域別の環境教育の推進というところ、事業所のところですが、事業所というところでもとなく事業所さんというのもスタイルも様々ですし、ひとくりにするのがとても難しいところがあるかと思えます。YMCAではYMCAフィランソपी協会といいまして、熊本県内を中心に43社、さまざまな企業の方といっしょにボランティア活動であったり、地域貢献活動をやっていますが、近年環境に関する意識の高まりというのはどの業者さん、事業体であっても持ってらっしゃるというのを感じます。CSRというのがとても大きなキーワードになると思うんですが、そういった文言もこのひとつづくりの、特に事業所の中には入れていく必要があるかなと感じました。その下の“地域のエコリーダーの育成”というところで、いきなり“エコリーダー”というのが出てきたので、私はイメージするものはなんとなく環境のことを皆にファシリテートしたり、中心となって引っ張っていくイメージなのかなと思ったんですが、途中途中で“環境リーダー”という言葉になったり“エコリーダー”という言葉になったり。エコリーダーというのはどういうものなのかというのをもう少し具体的にした上で、この言葉を用いた方が一般の市民の方にも伝わりやすいのかなと感じました。ちょうど地球温暖化防止活動推進員という言葉も出てきますが、それとどう違うのかとか、少し文言的なのところも考えていったらどうかと思えます。

○大住委員長

それでは岩本委員お願いします。

○岩本委員

私は皆さんの意見をうかがってすばらしいご意見だなと思っていました。私は今回この資料を見た限りでは特に気になるところはなかったんですが、“ライフステージ別の環境教育”というところで、先ほどから意見が出ておりましたが、子どもたちに対する教育というのは、私が所属している青年会議所等でも活動として行っています。子どもたちは本当に素直に受け入れてくれて、やっつけてすごくやりがいがある活動ですが、大人たちに対する教育というのをここで本気でしないと、今の大人たちが生きている間はなかなか環境は良くならないと。今せっかく素直に受け入れた子どもたちがまちを歩いているときにごみを捨てる大人を見てがっかりしてしまうとか。せっかく素直に育てている子どもたちに悪影響を与えるような社会ではいけないんじゃないかと。もともと私たち日本人というのは地域でのつながり、ご近所づきあいというのが強い文化といいますか、そう

いう土地であったと思うんですよ。そういうところで近所づきあいが強い中で生活していたらなかなか変なことは外ではできないと、見張るといって言い方が悪いんですけども、いつも誰かの目があるという状況で生活すれば大人でもうちよっとましになるのではないかと思っております。大人に対する教育、どうすれば大人は真面目にやれるのかというところを今ここで考えておかなければいけないのではと感じております。

○大住委員長

ありがとうございました。それでは次、片山委員よろしく願いいたします。

○片山委員

自分は市民活動団体として NPO として呼ばれているとは思いますが。農業をしているので、さつき守田さんが言われたように、どちらかと言えば外から戻ってきたほうの農業です。こういう所にもいるのかと思います。どうやってそう意識が低い農家の人を集めればいいのかといたら、今度 22 日に植木町で合コンをするんですよ。合コンするとだいたい来ます。バーベキューもしますしビールも飲みます。その中でどうやって意識を高めていくかというマイ箸とマイカップを持ってきてくれと言います。焼くものも植木の地産地消の野菜を入れますし、そういうことをやって開催すると熊日新聞も取り上げてくれますし、生産者も集まる。熊本市内からも若い女の子も来ると交流も深まる。政令市になる時になかなか植木のことを知らない熊本市民もたくさんいらっしゃいますので、こういうところで知恵を絞りながらやっていけば楽しいかなと思います。

一応 NPO の話をさせていただきますと、先日、韓国の忠清南道にかんくまから行ってあります。というのもかんくまが 7 年前くらいから韓国の忠清南道とって、道は熊本県の県みたいな感じで韓国の行政区域ですが、交流を持っていて今回は食がテーマで子どもたちの交流をしているんですよ。今年熊本から 4 人忠清南道に行って、来年忠清南道から子どもを受け入れるわけです。今回は例えば子どもたちにお好み焼きやチヂミなんかをつくらせたり仲良くさせたりしながら環境学習等もやりました。やった中で一番難しかったのが、もともと 10 名くらいの枠をつくっていたんですが 4 名しか集まらなかったんですよ。NPO としていろんなところで呼びかけをするんですが、「NPO 環境ネットワークくまもとです」と言っても知らない方は知らないんですよ。なので信用が不足している点もあって、そういうところを市役所や小学校に声かけをしてもらえるような助けがあったらいいなと思いました。私たちも活動している写真とかもありますので提供できるかと思ってあります。そういう子どもたちが先ほど藤原さんが言われたみたいに 4、5 年後、将来的にはリーダーになってくれればいいのかなと思っています。あとかんくままでは 8 月 19 日に定例学習会の第 2 回の学習会を行います。今回のテーマは「生物多様性」ということです。前回は宮北先生が 6 月くらいにされたところです。生物多様性といっても私はなかなかわからないので勉強していかなければならないと思っています。かんくま会員外でも 100 円だったと思います。かんくま会員だと無料だったと思います。6 月の宮北先生の学習会には熊大医薬学部の方が 20～30 名いらっしゃったと聞いています。宮北先生はお話も上手なので勉強になったと思いま

す。そういうのを全 4 回計画しておりますので市民の方に環境学習していただければと思っています。

あと佐賀の武雄市の樋渡市長の講演を聴いたんですが、九州巨木物語というのをされるそうなんです。熊本の大楠と佐賀の武雄の木と鹿児島のかなかの木というのを参加者が見て回ったら、最終的にはゴールのところで何かもらえるんですよ。そのとき言われていたのが、「日本人はスタンプラリーみたいに回るのが好きみたいで期待している」と。私の友達も真夏なのに四国のお遍路さんに行ったりして、やっぱりそういうのは好きなのかなと思って。私は熊本の大楠を普通に何も無い時に見に行くかと言われたら見に行かないと思います。こういう仕掛けの中で行くと熊本のほうがすごいよねと誇らしく思えたりして、そういうところで気持ちが芽生えればいいのかと思っています。

あと私たちはかんくまの中でユースかんくまという若手のグループにいますが、私と同じくらい若い子たちがいろんな環境の地域づくりのようなことをしています。例えばグリーンバーグといって月に 4 回くらい街の清掃をしている子たちがいて、その子たちはもう 3 周年くらいしています。タワーレコードとか、コココーラとかから協賛をもらったりしてちょっとかっこいい感じでごみ拾いをしているんですよ。他にもサンロード新市街のところでアースデイマーケットといってオーガニックな農産物を月に 1 回売っています。そこが 1 周年でいい感じに若者も集まってきました。私が一度市政だよりも載せたらどうかと言ったんです。でも植木町にいた時は分からなかったんですが、熊本市になって市政だよりも来ると、あんなに膨大な量の小さい字では読まないなと思っています。なので例えば環境ポータルサイトみたいなネットの中で環境に特化した、「グリーンバーグが何日にある」というのがわかればいいなと思います。

最後に私は 10 月の水あかりの実行委員にも入っています。みずあかりの実行委員というのはのべ人数で 2000 人くらいいます。その中で今月末くらいからボランティア募集も土日に分けて行きます。だいたい毎回同じ人が来ているんですよ。熊本市役所の方たちもたくさんいます。それが本当にこの日にボランティアがありますよということを市民の方がどれほどの人が知っているのかなと思います。去年たまたま「スパイスで見たよ」という県立大か熊大の子がいて、見てる人がいるのかなと思いましたが、それほどいません。なのでそれもさっき言ったみたいにサイトなんかでぱっとわかれば楽しいかなと思います。以上です。

○大住委員長

ありがとうございました。いろいろと今出てきた中で生物多様性という文言は貴重です。それから若者の参加の仕方というのはいぶん具体的にたくさん提案していただきありがとうございました。

○片山委員

さっき言われたみたいに NPO はお金がないんですよ。かんくまは会費もありますがそれも流動的です。どれだけ集まるかわかりません。助成金も申請が通るか通らないかわかりません。でもど

っちも当てにしてたらだめだと思うんですよ。あつたらラッキーという語弊がありますが、この中でNPOもNPOというだけじゃなくて趣味とか遊びのレベルではない事業体でないといけないと思います。先ほど藤原さんが言われたように太陽光パネルの設置をかんくまでは福田農場にしたんですかね。私は計算式がわからないんですが、月にいくらずつ、パネルの電気料を換算してお金をいただいたりして、そういう形でベースになるお金をしっかり持たないと何もできないと思います。

○大住委員長

ありがとうございました。それでは三島委員お願いします。

○三島委員

私は“ゴミなくし隊”というエコパートナーくまもとの中の一つのワーキンググループです。私たちが目指すのはゼロベースなんです。だからゼロベースを目指すということであれば、どういうことが私たちにできるのかという実働部隊みたいな感じです。市民が市民に伝える、生活者が生活者の視点で生活者に伝えるというのが一番大事だと思うんです。ゴミを減らすということは毎日の生活のことだから、それがストレスにならないように、楽しみながらどうやって取り組めるかと考えるのがゴミなくし隊だと思うんです。そのことを考えると同時に市民に伝えていかなければ、市民の協力がなければごみは減らないわけですから、自分たちの気がついたことを形にして、市民に伝える、市民に伝えるにはどういう方法があるかということ積極的に動いているのが私たちの活動ではないかなと思います。先ほど奥山委員も言われましたが、自己満足に終わらないためにはネットワークをつくる。ネットワークをつくって違うネットの中で自分たちの活動を伝えられるようにしていくということで、私たちはその中の一つ、マンションモデルとして集団回収に取り組んでいる人がいます。マンションというのは集合住宅ですから人はいるんです。しかしまとまりがないんです。それを無理をせず、自分のできるところから声かけをしていって、「できたらできたしこ」でいいよねというところから入っていく。集団回収をするので、市からお金 comes んですよ。それを貯めていってマンションの取り組みとして組織づくりに利用するという形にされています。今度夏祭りをされるらしいんです。最初から大きいことを目指すのではなく、まずは自分にできることを隣の人に伝えていくということが一番大事かなと思っています。

それからもう一つ私たちが取り組んでいるのが段ボールコンポストです。最初、私がゴミなくし隊の中で取り組んだんですが、一番問題になるのは燃えるごみ、燃やすごみです。組成成分調査をすると、生ごみが一番問題で、どの自治体であろうと量も燃やすごみの半分が生ごみであると。じゃあどうしたらこの生ごみを減らせるか。自分で出すことを減らすのが手っ取り早いので、市民が、生活者が一人ひとりが取り組める方法として、段ボールコンポストに取り組んでいます。今、市の公民館の事業の一つとして取り組んでいただいていますので、そこの講師とかをお受けて、ただ、段ボールコンポストのやり方を教えるだけではなく、ゴミなくし隊という行政と市民と事業者で成り立っているエコパートナーの会議の中で得た情報を熊本市のごみに関する情報をその中

で必ず伝えるということ。そしてなぜ生ごみを減らす取り組みが必要かということもその中に入れていくことによって、意識付けができるんです。毎日のことですから毎日できないこともある。しかしそれをねばならないということではなく、やったらやっただけ減らすことができるんだというくらいの意識で皆に取り組んでもらえたら長くやってもらえるかなと思って、そういう意識で皆さん方にお話をするようにしています。やはり市民が市民に伝えるというのが一番広がる、同じ目線で話ができるのでとてもいいんじゃないかなと私は思っています。

○大住委員長

ありがとうございました。それではもう一度中村委員をお願いします。

○中村委員

東海大学の白川流域の件ですが、私は 15 年くらい前から関わってきています。そのときは白川わくわくランドかなんかあるでしょ。あそこに国土交通省で入って、阿蘇の黒川から入って、川の通信簿作りというのが国からの要請であって、阿蘇から流域連合をつくって、今は子飼商店街、あそこが餅つきとかやっています。うちは中島で熊本港だったんで、まちづくり委員会を組織してやっていたんです。ただ、先ほどあったようにお年寄りの中には固まった考えの人がいて、結果的に子飼商店街をどうにかしようとか、川を使うような。私たちはそっちからちょっとずれたんで。その前が岡さんというのがいて川の会議とあって筑後川からとかいっぱいあって、そのときも人を集めようとしたんですが、川に見向きする人がいなかった。私はそのときは 20 年前だから、そのとき来ていたら極端に言えば江津湖とかも私が主に動いていればきれいだったのかなと。今思えばものすごく反省しています。東海大学もやっているんですが、皆めいめいが情報の発信と収集というか、エコパでも情報を収集して、どこで誰が何をやっていて、何月何日に何をやるという情報発信、収集をやるのかなと思っているんです。そのときにネットワーク、先ほどグリーンバーグというのが出ました。これはまちづくりふれあい委員会というのを地域づくり推進委員会でホームページを立ち上げているんですよ。これはウェルパルに行ってもらおうと誰が発信してもいいようにすぐに会員になれる。グリーンバーグさんのは見るんですけれども、アメリカが中心のイメージでやっているんで、ものすごく活動しやすいみたいです。そういった NPO 活動をするところを集めるためにホームページをつくったんですが、そこに情報を発信してくれる人がいないという状態でもあります。

あと小林修先生なんかは白川で蛍の育成なんかもやっていらっしゃるので、蛍つながりで水前寺動物園でも蛍を養っているんで、その蛍をどこかに養殖しようと思ったら、あちこちに行ったらいけないということです。だから松尾か金峰山系の蛍を捕まえてきて、それを動植物園で増やして中島につなごうという取り組みというか案です。そういった人をつなげるような仕組みをつくっているんですが、なかなかそこに人が集まらないみたいです。

あと小学校単位ですが、西原の方でテレビを 1 時間ほど消そうというのがあります。なぜかというところは教育委員会が「親子の会話のために」テレビを消そうと。それで県で話し合っていて、そ

れを熊本市全部でしようと、そうすると CO2 が 1 時間消しただけで何パーセントか減る、数値化ができるからと。それを教育委員会に頼んだら「親子の会話のためにしているから趣旨が違う」と言われる。だから「そうではなくて、環境部会の PTA か何かでされるといいですよ」という話をやっています。頭が固いとそこから変わらないから、そのあたりをどうにかしようと考えています。

あと熊本エコプロジェクトというのがあって、熊本温暖化対策センターがやっています。県の予算で 300 万円の事業があって、18 日締め切り。これは皆さんのところに情報として来ていますか。私たちはたまたま EV クラブとあって、単 3 電池 10 本でワイパーモーターで走らせる電気自動車を今 7 回くらいやっています。去年から温暖化対策センターと組んでいます。その事業に申請しています。そういった事業申請の情報などもエコパでできるかわかりませんが、今度県と直接情報を流してもらおうかなと思っています。私たちの裏情報が早いものですから、そういう情報を集めて皆さんに提供したときに皆さんの反応があって、自分も小さい情報でいいですから、私も中島でふれあい市とかもやっていて、地産地消で売っているんです。そういったことは自分のホームページでもやっています。(市役所)8 階(地産地消推進室)の食の応援団の役員もやっています。そこでやっているんですが、そういった感じでふれあい市をつくる時には助成金ができるような形もありますので。だからそういった情報を集めてやる人がいれば、コーディネーターとか。会議体と行動体をつくってから、会議体でそういったいろんな情報を集めて。エコパでも YMCA さんが交通センター前でやったアースウィークを皆でやろうと言ったけど皆忙しいからですね。エコパの人がいなかったんで言いますけれども「あれ、どうして? エコパの人は何なんだ? 」という感じがありました。なかなか各々が活動していますので。ただ、1 年前からもう少しわかっているとやすかったかなと思います。急にアースウィークの会議がありますよと聞いたら、私たちの活動と全部ほとんどだぶっていて、同じ日くらいにあっているんですよ。同じ日にあるやつをくっつけられないとか。ただアースウィークさんが成功していらっしゃるのは、20 日間とか期間があるのに 1 つのパンフレットに何月何日に何をしていますとか、ああいった環境月間の時とかはまとめてできますから。今ここにいるネットワークをつないただけで何をやっているかとするだけでも熊本市内、県内でこういった活動をやっていますよという小冊子とかはできると思います。それは私たちエコパに言ってもらおうと至少くらは市の予算で広報誌ができると思います。広報活動として。そういったとりまとめをエコパとしてやっていきたいと思っています。情報が集まるところとホームページサーバも 2 か所か 3 か所持っています。その中で SNS もつくっています。私たち、つくった本人たちだけで SNS を楽しんで、また裏 SNS をつくって人に見えないところで遊んでいるんですよ。もう少し市民が参加されるといいんですけども。そこまで私たちはややこしい会話をしていますので。その表のところはフリーで使えますので、そういうところかまくまのネットワークとつないでいきたいと思っています。あと国と県と市をまとめるような団体、NPO がなかったんで、その辺をエコパートナーで今からできれば国とか県とか市の情報を集めて。

○奥山委員

ちよつといいですか。今、国とか県とかおっしゃいましたけれども、国際交流会館に EPO 九州と

いうのがあります。そこがその行政と市民とNPOをつなぐ役割なんです。そういうこともしなくちゃいけない。なかなかスタッフもお忙しくて、体が足りないという感じもあるので、そこもEPO九州とも協働しながら何かやれば何かできるのかなと思います。

○中村委員

EPO九州さんに相談に行くとエコパートナーをつくる以前の問題をEPO九州がやっているの、エコパートナーができた状態では手が付けられないと。あまりにも会議体できてしまって、会議ばかりして実践行動ができない。YMCAに行っていると思うのが「行動に出ろ」と言われるんです。私たちは会議ばかりして一歩も進まないという反省からYMCAさんに何回か会議に行っただけです。若い人たちの意見が私たちの耳に入ると、少し元気づいておだててもらおうとどんどん走って先へ進むから、そんな感じなんです。長くなりました。

○大住委員長

何かと誤解を受けそうな発言ですが。

○三島委員

すみません、文章についてよろしいでしょうか。“地域別環境教育の推進”のところの、“地域のエコリーダーの育成”です。その中の“市民活動団体”とありますが、「環境保全活動を実践します」というところで終わっているんですけども、今後をにらむのであれば、「地域のエコリーダーの育成(プログラムを提案する)」というところまで市民団体は取り組むべきではないのかなと思いますので一言言わせていただきました。

○大住委員長

ありがとうございました。そういうことも言っていただきかけたのです。今いろんな貴重な意見が出て、こちらには優秀な事務局がおりますので、今のをうまく振り分けていただければいいと思います。それでこの場で発言すると、ああいうつもりじゃなかったということをおぼろげに思ったり、あれを言えばよかったということがあるので、あとから追加意見ということを出させていただくようにしたいと思います。そして今日お休みの方たちもいらっしゃると思いますので、お休みの方たちと私たち自身の追加意見を言うということで、ひとつづくりについてはこれでよろしいでしょうか。

○奥山委員

ちょっといいですか。市の皆さんに聞きたいのですが、ひとつづくりの一番下の市民のところですが、“地球温暖化防止活動推進員となって活動できるよう”とありますが、市は“推進するため、地球温暖化防止活動推進センターの指定を検討します”ということで、今から育成していくということでしょうか。

○事務局

育成というか地球温暖化防止活動推進制度というものがあまして、熊本県内にも120人くらい、熊本市内在住の方でも30人くらいいらっしゃいます。温暖化対策推進活動の法律というのがありまして、その中で法的にも定められていて県知事が委嘱する制度です。今度改正がありまして、20万人以上の都市については、それぞれ地球温暖化防止活動推進センターの地域センターを持つようになっております。また合わせて地球温暖化防止活動推進員さんの委嘱ということもできるようになっています。そういう法的な改正を踏まえて市として取り組んでいきたいという考えです。

○大住委員長

よろしいですか。ありがとうございました。それでは言いっぱなしのところ次で次のまちづくりにいきたいと思えます。もう各々の意見というよりもここは言っておきたいという方が挙手をしてでも意思表示をしていただきたいと思えます。ずっと一人ずついきましたので、もうそろそろ自由になっていただこうかと思えます。結局名指しでしょうか、先ほど藤原委員が言いかけたのを止めてしまいましたので、藤原委員お願いします。

○藤原委員

まちづくりのことでですね。それは“協働”というのがキーワードになってきているようです。私はアースウィークの事務局をやらせていただいています。とても難しさを感じているところであります。というのが個人の方がそれぞれ集まって何かをやろうというときには、とても力強いパワーになるんですけれども、異なる団体とか異なる組織を持っていらっしゃる方々が一緒になるという時に、それをつなぐ役目をする人たちというのがなかなかいません。先ほど奥山委員から「お金がないので難しいとおっしゃられた」というお話をうかがって、なるほどなと思ったんです。おそらくお金もなんでしょうけど、そういった団体をつなぐという役割をされるところがなかなかないんだろうなと思えます。やはりこのプログラム、“協働”というのをするときには仕組みとして、それが次回の議題になるんだと思えますが、その情報シェアまではできると思うんです。いろんな団体が集まって「うちはこんなことをやっています」「おたくはそうなんです」と。ただ情報シェアから一歩進んで、その“協働”になったときに何が必要で何が足りなくて、どういうところを市民だったり事業所であったり市がサポートできるのかということを考えていくことがとても重要ではないかと思えます。そういったところが逆に言うと、コーディネートをするような人を育てるというのもひとつの面では、単に環境の専門家を育てるよりは人と人との地域づくりのスペシャリスト、そういったひとつづくりという観点も必要ではないかなと思えます。

○大住委員長

ありがとうございました。他の方ありませんか。もう積極的に出てください。それではまちづくりです。

永木委員ありますか。

○永木委員

先ほどのひとつづくりのところにも出ていたことなんですが、いろんな情報があって一つにまとめるというのはとても大事だと思います。システムづくりとかその人と人が個人だったらできないことも皆が集まって相乗的に力を合わせて取り組むことによってできないこともできるようになると思います。そういった一つにまとめるというような、いくつかそのボランティア団体が散らばっているような状態だとどうしてもやりにくいところがあると思うので、ボランティア団体を一つにまとめるということではなく、情報でつながっていけるようなネットワークをつくっていければいいと思います。

○大住委員長

ありがとうございました。お二人からそのあたりのことを強調されたように思います。吉浦委員、事業者としてまちづくりに関わるということはいかがでしょうか。

○吉浦委員

そのあたりが非常に弱いなと思っております。我々は仕事の延長線上でやっている感じがします。それこそ CSR、企業の社会的責任で何をするかということで我々も迷っているところです。ある程度段階がありますよと少しずつやってはいるんですけども。それは自分たちの中だけで終わっている感じで、事業で広がるという感じではないですね。

○大住委員長

具体的に何かしていらっしゃいますか。

○吉浦委員

それこそ老人ホームを慰問するとか、坪井川の清掃作業とか少しずつという感じです。

○大住委員長

個別にはしていらっしゃるの、それはつながる要素がありそうですね。

○吉浦委員

逆に事業者はある程度 CSR で何かしようというのはどこもあると思うんです。それが具体的に何をするかといったときにアイデアがないもんだから。そういう事業者を今の祭りのノリでつなげていくという形ができれば、それぞれ参加されるんじゃないでしょうか。

○大住委員長

ありがとうございました。他の方。では守田委員よろしいでしょうか。

○守田委員

コミュニケーションとか情報交換とか、そういうのは地域で皆が、先ほど言われたんですけれども人と人がコミュニケーションを取り合わないとまちもよくなっていかないと思います。私たちも消防団なんかにも入っているんですが、そうすると自治会の活動なんか一緒に参加したり、後継者クラブなら後継者クラブでまちの市民の集いがあるときにいろんなところと一緒にあって、まちをまず盛り上げよう。ついでに熊本も盛り上がるからといって。やはり活動団体のエコリーダーさんの派遣もいいと思います。それで私たちのところに来ていただいて勉強する。今度はそちらの地域に私たちが私たちの地域のことを特性を教える、よそにはない下流地域の良さを教える。お互いで熊本市も大きくなったので、そういうところで何かやっていけばいいと思います。

○三島委員

下流地域と言われましたよね。自分たちが下流だけのところでとどまるのではなくて、阿蘇地域の人たちと交流をやっていききたいといわれたので、点としてではなく、線、あるいは面としてつながっていかないと、物事は解決しないんだろうなと思います。

○守田委員

今までは私もただ田舎の端っこで農家をしていたんですが、こうやって参加したことによって今度は私が後継者の会議に行ったときに「今こういうのを習っているんだよ」というのを私が言っていくことが大事だと思うんです。今度はそれを聞いた皆が少しずつ関心を持ってもらって、後継者は熊本市中にいるんで、その地域地域で会長をしている人間が、こうやってしていこうよというのを言ってくれることが私たちの役目だと思っています。

○大住委員長

ありがとうございました。心強くなりますね。他の方はないですか。ぜひこれだけはということとか。もう笑われるようなことを言ってみようというくらい。なければ強い味方の荒木委員にまとめを兼ねて公表をしていただきたいと思います。55分まで大丈夫ですから。

○荒木副委員長

大変貴重な意見を皆さんから出していただいて一生懸命メモをとる作業に追われていました。皆さん方のご意見をだいたいもれなくメモをしたつもりしております。ポイントになりますのはこういうエコ活動に関して、これは熊本だけではないですが私は東京で過ごしていたとき、全国各地をかけずり回っていたんですが、子どもたちがとても素直に環境活動に取り組む、クラスで何かを決めて発表会をやろうとするとき、あるいは子ども会、環境に関わる問題について子どもたちが一生懸命に取り組んでいくと、私もあちこちで体験しております。ですから最初のご意見の中に“次

世代のエコ活動を広めていく人材を養成していく意味”では十分子どもたちはやっているのではないかと。これから先も今の調子で進めて行くように持っていったらいいのではないかと。これが最初の問題であったのではないかと思います。

それからエコ活動を積極的に進めて行くためのひとつづくりという観点からうかがっておりますと「大人はダメだな」というのをつくづく感じました。というのは一週間も経たないでしょうか、前に熊本市が政令指定都市になるための行政区割りから区役所の位置、設定について、あるいは機能、大区役所主義というような話があって、「どんな役割を果たすのだろうか」、「この区に入ったら今までよりも不便になる」、といてずいぶん反対運動が区の設定のときにはあったわけです。説明会を積極的にやっけていこうとするとときに情けないことにせつかく行政が用意した説明会に、事前に告知されていたにも関わらず、1人も出席者がいなかったという実態がありました。あるいは非常に少ないのは3人か4人とかですね。行政としてはせめて100人くらいは地域の住民の皆様がいらっしゃるだろうと思っていたら、わあわあ騒いだわりには、実際詳しい説明を住民の皆様にしよと、理解を得よと努力を払っているにもかかわらず、詰めた言い方をすると非協力的な市民の態度にあきれてしまった。これが大人の醜い一端を見せているのではないかと。いくらわさもん好きで飛びつきやすい熊本県民の性質とはいえ、これはあんまりだという感じを受けました。問題はそういう実態を見ますと環境、エコ活動に関しましても、今日お集まりの皆さんは環境に理解の深い方々ばかりですから、かなり積極的に取り組んでいらっしゃるということはわかるんですが、一般に子どもたちの何分の一も大人は取り組んでいない。あるいは積極的に活動しようという気持ち薄いということがあります。この人たちにどのように何を媒介にしてその活動を、いわゆるファシリテートをしていけるような形を持って行くべきかということ、この環境計画を策定する中に手段として位置づけを明確化しておく必要があるであろうと。おそらく子どもに引っ張られて大人が動くというケースがかなり大きくなるというご意見を皆さんの中で受け止めることが出来たわけです。

それからいくつもあります、大きな所から申し上げていきますと、吉浦委員さんが供給サイドの考え方ということを言われました。それでは需要供給の需要の側の考え方としてはいったい何かあるのだろうか、需要と供給をつなぐということを少し意見交換していったらいかがであろうかと。そうすると少し理屈上も活動上もつなげていくことができるだろうし、情報のつなぎということ、あるいはコミュニティというもつなぎの言葉でありますから、その地域間のつながり。点から線へ、線から面へと広がりを持ったつなぎですね。水俣市がもやいすとをやって、これは最初あまり「そんなことをやって何になるんだ」という言い方をされていたようですが、県立大学でも「もやいすと」とは面白いということでそういうプロジェクトを立ち上げました。阿蘇でもやいすとの実践活動を、阿蘇の中高生、農業者、それから行政も入って大学も入って。私もその中に入り込んで行きました。もやいということ、つなぐということなんですが、都市部は人間関係が希薄化して100歳以上のお年寄りが行方不明、ほったらかしにしてるとというのが最近話題となっております。これは別段都市部だけではない、そうでない中山間地域においても希薄化してきているという実態があります。その点があるので、なぜなんだろうか。これは価値観の大きな変化が影響しているのだろうか。これ

はもう少し原因究明をやっていかなくてはいけない、そんな感じがしております。

それからもう一つはこういう活動を展開していく中で、活動できるような人でたくさん作り上げていくというのは、いかにもかっこよく聞こえるんですが、何でもそうですけれども、だいたい「あることをやりましょう」と賛成をしていただけたからやることに決めたことでも、ふたを開けたら決定したことを何人が率先してやるのでしょうかと言いますと“1万人いますといったら1%程度”です。あまり一生懸命にやっているんだから、皆ももっと一生懸命にやってもらわないと困ると過大に期待するのはアメリカであろうとイギリスであろうとあまり差はありません。社会調査でこういう調査はたくさんなされていると思いますが、だいたい同じです。熊本市役所の中でも同じ事をやろうと言っても15%超えないはずですよ。これは職員であってもそうですよ。だからそんなものです。そういうことに一定程度、専門的知識をもって、活動していかないといけない立場にある人たちでも、だいたい今5、6千人いるんですか、その中の15%といったら、500人程度の市の職員は若干手足を動かしてくれるだろうけど、あとの多くの方は簡単に動かない。「自分の仕事が忙しいから」ということになる。これが一般の市民社会においても「仕事が忙しいから、そういうことはかまっちゃおられんばい」と。中山間地域にいくと「自分の仕事以外のことに手を出すのはばからしい」という声を聞きます。結構根っここのところにあるということです。そういうことを打ち破ったケースが三重県と岐阜県の間にある藤原町という町です。ここでは守田委員さんとか片山委員さんがおっしゃっていただいたような、農村地域、中山間地域において、今の時期、道ばた、土手、雑草が生い茂っている、木も大きく枝が伸びて道をふさぐような状態がおきているわけですが、そういう木の枝を切り落としたり雑草を刈ったりして集めて、それを堆肥化工場を作ってもらって、そこで65歳以上の人たちだけで、堆肥化工場を運営している。わざわざ65歳以上と限定したんですよ。64歳ではそこでは働けないと。いわゆる年配者でも家でくすぶっているよりは外へ出て、人と交流をしながら話し合いができると。自分が働きたい、体調がいいときにそこへ行ってタイムカードを押して何時から何時まで働く。最初は時間給840円です。ところが名古屋とか京都大阪のような大都市がバックに控えている関係で、都市生活者の中にはベランダに鉢植えを置いてキュウリとかトマトとか育てるときに、だいたい1メートルくらいのプランター深さ30センチくらいのプランター、そこへ堆肥を買ってきて、自分のベランダで作っている人が多いんです。飛ぶように堆肥化工場の堆肥が売れていったということです。当初9800万円かかった堆肥化工場建設費が1年で挽回できまして、2年目からは収益が3千万円、4千万円と上がっていくようになって、それを藤原町の財政に入れて、今度は65歳以上で働かれる人たちの時間給は倍の1時間1500円に上げてやっていると。熊本あたりだったら雑草や木の枝がたくさん堆肥化できる。そういったもの有機農業、都市生活者のそういう趣味程度からはみ出したようなところに堆肥を売る。ちょっとだけ熊日さんが情報を流してくれると熊本県内でも売れるでしょう。ナフコとか、ニトリとかサンコーとか、そういうところに売ってあります。結構高いです。それよりも安くしていてもそういう堆肥化工場をつくられると結構捌けるのではないかと感じます。そういう一つの形のエコ活動に直結した結びつきでございますので、正面からエコ活動とは言わなくても、こういうことをやるとCO2削減にこういう風に役立ちますよということがわかるような仕組みを考えて、PRしていくということが必要にな

るのではないかと思います。

それからもう一つ大きな問題としては情報の問題。今日の皆さんの意見の中で全員に共通しているのは、私が受け止めたのは「つなぐ」という言葉がキーワードだなと思いました。キーワードをうまく環境審議会の方に提言として出していただいて、環境総合計画策定の中に入れ込んでいただくのが重要ではないか。これはまちづくりにとってもひとづくりにとっても情報交流にとっても、地域と地域をつなぐことにとっても全部その用語は有効であるというわけなんです。ですからなんとなく情報は活動しているその団体、あるいはその人の中にはもやもやしてくすぶってたまっているんだけど、それが外へ広がっていかない。情報のつなががないから、そうなって閉塞化していつている。そういった物をうちやぶる何かを考えて、環境総合計画のキーワードに入れ込むことが必要ではないかと思いました。

それからその象徴的なものが、こういう会議体の中では、どこの会議体に参加しても立派なことと言われるのですが、それが実践に結びついていかない。「何が結び付けさせないんだろう」と考える必要があると思っております。皆生きていく上では忙しいわけです。それが忙しい忙しいと言っていたらつなぎは薄くなっていくばかりで、他者との連携、協力というものは出てこないということです。だから自分は環境のこういう側面では一家言のことはあるけれども、他の人の環境に関する関心ではちょっと違う。そのときになると黙ってしまう、そういうことで私は結構だと思うんですけど、自分の関心もてる環境問題について、そこだけは一言言うと、これを言い出していくことが必要だろうと思っております。それを行政を見てみますと、総合的に全部まとまった感じに、環境問題にはこう対応しなくちゃいけないと、こういう勉強をどこの自治体に行っても、あるいは環境省に行っても同じような考え方をしているわけです。それを一般市民に全部求めていくというのは無理難題であるんだと。一つの側面について、環境のある側面について、こういう活動をやっている、こういう活動を通して、こういう考え方が出てきた、手法が出てきた、ノウハウが出てきた、それを出していただく。そうするとA、B、C、D、Eさんの5人が違う側面から意見を出してもらってそれだけで環境問題に対する深まりと、つなぎの協力連携が出てきて、新しい環境価値を自分たちの力で守り育てる、維持していくことにつながる。いわゆるサステイナブルな環境へと、我々が生きていくために必要なその環境といったようなものが守られていくことになっていくのではないかと思います。ですからそういう形で、全部総合的に環境問題について一人ひとりが身につけると言うのはナンセンスです。1つの側面でもよろしい。それを他の人たちと連携し合えばうまく輪が広まって、環境総合につながっていくんだと、こういう考え方がこれからは求められるだろうと。

最後に一言だけ申し上げておこうと思います。協働は難しいわけなんです。簡単な言葉なんです。考えれば考えるほどとても難しい。それでここにもこのデータを最初、村上さんから見せていただいたときに「あ、これいいじゃない」と私は申し上げたわけなんです。ひとづくり、まちづくりという一つの項目と、それとどう切り口から見ると、縦横をクロスさせたこういう一覧表を作って行政を進めていくというのは一つの手法としてはなかなかいいのではないかと私は申し上げました。ただ、私はそのとき、こういうことなんだと言えよよかったんですが、それは何かと申しますと

“協働”というのは手段なんです。あくまでも手段なんだ。“目標”というものはこれから私たちは意見を集めて、こういう目標、こうありたい、こうしたいという目標を設定する、こういう社会環境にしたいと。それに到達するための現況把握が必要だ。現状と課題を的確に押さえられる。これは必要です。それであるべき姿の熊本市の望ましい環境といったものが、現在からこの望ましい姿まで、どうやってたどり着くのか。このたどり着く間に使うのが“協働”手段なんだ。そういう見方です。それで一つは大目標を達成していくために必要なのは中目標、これが大手段に位置するわけです。目標と手段の相対的な関係はそういう形なんです。ですから大目標があつて、中目標、それと身近な小目標、具体的な目標とやりますと、中目標が大目標を達成するための手段。それからその中目標を達成していくための手段が具体的な手段であると。そういう具合に体系性をちょっと堅苦しい言葉ですが、手段と目標の体系性をちゃんとすることが、計画を作るときには絶対不可欠です。これを環境審議会にはこんがらがった使い方をしないようにということを、こちらの委員会の意見としてあつたということをお願いしたいと思っております。長びいてしまいました。このへんで辞めさせていただきたいと思っております。

○大住委員長

どうもありがとうございました。本当によくまとめていただいたので、これが文章になって出てきますから皆さん楽しみにお待ちください。今日とにかく言っていただいたことは発言録として出していただいて、それで足りないところは足していただく。その発言録の中にはこの中に“1. 計画の目指す都市像”で仮ですが、“世界に誇れる環境文化都市”、これでいいのかどうか。それから“2. 環境行政の基本理念”ということを私たちの議論した中から引っ張り出してくださいましたけれども、これでいいのかどうか。今の時代ということ、つくる時代と10年後を見据えてこれでいいのかどうかということを含めて、今日言い足りなかったことを出していただくことにしたいと思います。優秀な方たちが後ろに控えてくださっていますので安心してどんどん出してください。それでは事務局から次回の内容をお願いします。

事務局

ちょっと補足のお願いをよろしいでしょうか。ひとづくり、まちづくりということで、特に私たちがまちづくりの中で一番下に国際交流という観点を入れております。この中では今のような話ではつなぐとか意見が出ましたけれども、そういう中では広げますというだけではちょっといけないなと思う部分がございます。少しこういう所も我々にとっても難しい部分がございます、どう国際交流を私たちの生活に加味していくのかというのがとても大きいテーマでございます。このところもあわせまして、ご意見いただければなと思います。

○大住委員長

それでは皆さんよろしく申し上げます。それでは次回の議論の内容をお願いします。

■事務局

よろしいでしょうか。それではたたき台をご覧ください。今回は本日ということで重点協働プロジェクトにつきましてのいろんな考え方、取り組み姿勢の議論をしていただいたわけでございます。次回は次回予定とありますが、第 4 章の“市民意識調査の項目の検討”、これはもちろん私どもの方からも資料を出させていただきたいと思っておりますので、あとでご確認をいただければと思っております。またあわせて第 5 章“推進体制”というところまで、そういう中で今後、これは大きい個別計画も第 3 次環境総合計画の中にもあるわけではございますが、この推進体制ということはどういう風な、今日のキーワードで言えば“つなぐ”というキーワードがございますが、これをどうやっていくのか、ぜひこれらについてもご意見いただきたいと思っております。今日はエコパの会長もお見えいただいております。エコパは第2次環境総合計画の推進母体という位置づけになっていただいております。よろしければエコパでも第3次環境総合計画でももし可能でございましたらエコパさんのほうからもそういう考え方もお出しただいて、ぜひこの場で、市民検討会議の意見として出していただけるようなものが出ればとてもありがたいと思っております。

○大住委員長

よろしいですか。それでは次回会議についてお願いいたします。

■事務局

次回の会議につきましては

9月の14日、火曜日でございますが、午後3時から予定しております。会場につきましては市役所の南側にあります駐輪場の上の8階会議室で予定しております。資料につきましてはまた改めてご連絡したいと思っております。

○大住委員長

今日はこれで終わりたいと思っております。皆さんご協力ありがとうございました。